

有明海総合研究プロジェクトの自己点検評価報告書

1. 部局等の目的・目標

プロジェクトの目的

佐賀大学でこれまで進めてきた有明海に関する研究を継承し、平成 16 年度は学内プロジェクトとして、平成 17 年度からは文部科学省教育研究特別経費の支援を得て、新たな組織を立ち上げ、5 年計画の「佐賀大学有明海総合研究プロジェクト」を実施することとした。本プロジェクトの目的は、次の 2 点としている。（平成 17 年度年次報告書 pp.15 ）

1. 有明海異変の解明と再生に向けた取り組み
2. 有明海学の構築

目的 1 は、社会問題にまでなった有明海異変に、有明海湾奥部に位置する大学の責務として大学全体として取り組むことを明言したものであり、目的 2 は、有明海に関連する諸課題について基礎的、応用的研究を集中的に実施し、新たな地域学としての「有明海学」の基礎を築くことを目指したものである。

2. 部局等の概要

平成 19 年度は以下の教員・研究員・事務職員で研究プロジェクトを構成し、上記の目的を達成するために、平成 19 年度研究計画に従ってプロジェクト型研究を実施した。

プロジェクト長（兼任）	1
コア研究員（専任）	5
コア研究員（兼任）	9
非常勤研究員（ポスドク）	3
学内研究協力者（兼任）	9+2 チーム
客員研究員	8
事務職員（専任）	1
事務補佐（非常勤）	3
合計	39+2 チーム

有明海総合研究プロジェクトが実施している業務は下記の通りである。

- (1) 有明海異変の解明及び再生に関する基礎的研究
- (2) 有明海学の確立に向けた有明海及び有明海沿岸域をフィールドとする研究
- (3) 産官学諸機関との共同研究に関すること。
- (4) 海外の大学及び諸研究機関との国際共同研究に関すること。

(5) その他有明海に係る科学技術に関すること。

運営委員会の構成は、センター長（1）、副センター長（2名）、学部長5名、部門長6名、学長推薦2名。推進会議の構成は、センター長（1）、副センター長（2名）、専任兼任コア研究員（14名）

専任教員及び非常勤研究員の研究室は農学部中棟4Fの研究室及び医学部麻酔科の研究室を使用している。また理工学部都市工学科水理実験棟他の実験室を実験準備室及び実験室として都市工学科教員と共同で使用している。兼任のコア研究者、学内研究協力者はそれぞれの研究室を使用し研究を行った。

3. 領域別の自己点検評価（以下の事項に係る評価項目は、認証評価並びに中期目標項目に準拠したものを各部局等で設定する）

(1) 教育の領域

有明海総合研究プロジェクトは教育に関する業務を行っていない

ア 教育目標・成果に関する事項

イ 教育内容・活動に関する事項

ウ 入学、卒業等に関する事項

エ 教育環境に関する事項

オ 学生支援に関する事項

カ その他教育に関する事項

(2) 研究の領域

ア 学術・研究活動に関する事項

【点評価結果】 有明海総合研究プロジェクトの研究に関する目的は以下のことから十二分に達成されており高く評価できる。

【状況と理由】 プロジェクト研究の目的を達成するため、底泥・干潟研究部門、赤潮・生態系研究部門、環境モデル研究部門、微生物相研究部門、食水系感染症研究部門、地域文化・経済研究部門の6研究部門を設け、年度目標、年度計画を策定して共同で研究を行った。平成17年度の研究成果発表会を実施するとともにプロジェクト全体及び各部門の自己点検評価及び外部評価を行った。

研究プロジェクトで得られた研究成果は多くの学術論文として公表され、環境省有明海委員会における重要参考文献として採択されるなど評価されている。プロジェクト全体としては論文投稿、競争的研究資金の申請・獲得、シンポジウム、研究会等の開催、など研究活動はきわめて活発で成果もあがっている。外部評価委員の評価は、プロジェクト運営に関しても各研究部門の研究成果に関しても高い評価であった。

平成 18 年度の活動についての外部評価結果を以下に掲げる。

外部評価は以下の項目について実施した。

1. 外部評価委員全員によるプロジェクト全体に関する自己点検評価
2. 外部評価委員に関連の深い部門の点検評価。ただし、コア 1 に関しては相互に関連するのでコア 1 の 3 部門全体に関する点検評価をお願いし、今年度は中田先生だけから 3 部門の評価点を戴いた。

外部評価委員にはプロジェクト全体と各部門に関して 4 段階の評価点を付していただいた。

1. プロジェクト全体に関する評価 平均 3.5 (評価者 6 名)

2. 部門評価

コア 1	環境物質動態研究部門	平均	3.0	(評価者 2 名)
	干潟底質環境研究部門	平均	3.0	(評価者 2 名)
	環境モデル研究部門	平均	3.5	(評価者 2 名)
コア 2	微生物相研究部門		4	(評価者 1 名)
	食水系感染症研究部門		4	(評価者 1 名)
コア 3	地域文化・経済研究部門		4	(評価者 1 名)

4 評価 (成果は非常に優れたものである) にするか 3 評価 (成果にはいくつかの観点で優れたものが見受けられるとするかは、評価者の好みであるとの現も得ている。外部評価委員会の席上及び後日受け取った評価書においては特に注文もなく、いずれも高い評価を戴いた。

イ 研究環境に関する事項

【点検評価結果】 研究環境の改善に取り組んだが、十分な改善に至らないままとなった。

【状況と理由】 理工学部、農学部、医学部の協力で借用していた専任教員及び研究員の研究室・実験室及び事務室がいずれも学部教育研究棟の改修及び学科改編に伴う教員研究室確保を理由に立ち退きを迫られ、新たな研究室の確保に大きな努力が必要であった。

ウ その他研究に関する事項

(3) 国際交流・社会貢献の領域

ア 大学、職員及び学生の国際交流に関する事項

【点検評価結果】 高く評価できる。

【状況と理由】 英文で発表された学術論文及び発表論文は 56 編に上り、国際的な視点での研究遂行と成果公表を行っている。

イ 教育における社会連携・貢献に関する事項

ウ 研究における社会連携・貢献に関する事項

【点検評価結果】 きわめて高く評価できる。

【状況と理由】 研究プロジェクト自体が、2000年冬から翌年春にかけて有明海で大規模に発生した海苔の色落ち被害に端を発して社会問題化した「有明海異変」に対応し、地域の大学としての責務を果たすために発足したものである。プロジェクトの発足と前後して佐賀県と共同で設立した特定非営利活動法人「有明海再生機構」には有明海総合研究プロジェクトのメンバーも参加し、副理事長、理事、企画委員等の重要な役割を担っている。有明海再生機構は研究者と行政担当者、漁民、市民間を連携する諸事業を行っており、有明海総合研究プロジェクトのメンバーも積極的に参加している。

エ 大学開放に関する事項

【点検評価結果】 きわめて高く評価できる。

【状況と理由】 平成18年度のプロジェクトの活動内容を「平成18年度年次報告書」としてとりまとめて冊子として刊行するとともに、広く学内外に公開するためにホームページで公開している。<http://www.ariake.civil.saga-u.ac.jp/download.html> また、内外の学術雑誌等に公表した研究成果をとりまとめて「平成18年度成果報告集」を刊行した。有明海研究プロジェクトの活動内容を広報するためにニュースレターを1回刊行した。

オ その他国際交流・社会貢献に関する事項

(4) 組織運営の領域

ア 教育研究組織の編成・管理運営に関する事項

【点検評価結果】 きわめて高く評価できる。

【状況と理由】 研究プロジェクトを遂行するために次のような事柄を実施した

平成19年度の目標

研究プロジェクト全体としての平成19年度目標を次のように定めた。(研究目標については部門毎に別記載)

1. 有明海研究のような期限付きプロジェクト研究においては研究の実質的担当者である若手研究員の移動が頻繁に発生する。プロジェクト所属の研究者の動向を的確に把握し、研究者の補充をスムーズに行う。
2. 特定非営利活動法人有明海再生機構、独立行政法人水産総合研究センター西海区水産研究所(西水研)、各県水産振興センター及びその他関係諸機関と連携して研究を推進するとともに、成果を共有するためのシンポジウム等に積極的に参加し、討議を行う。
3. 大学の基本方針に則って外部資金の獲得を図る。
4. ニュースレター、ホームページ等、広報システムの充実を図り、有明海総合研究プロジェクトの研究内容を広く広報する。特に、大学広報室から強く要請されている英語版ホームページを年度内に立ち上げる。

平成19年度のプロジェクト全体の成果概要

目標 1

任期途中で他大学での活躍の場を求めて退職した 2 名の非常勤研究員の後任について公募を行い、非常に優秀な 2 名の非常勤研究員を獲得することができ、平成 20 年度初めから継続して研究を継続することが可能となった。

目標 2

環境省有明海・八代海総合調査評価委員会の評価報告書において策定することが求められている、平成 20 年度以降の有明海・八代間に関する調査研究のマスタープラン及びロードマップづくりに特定非営利活動法人有明海再生機構を通じて有明海総合研究プロジェクトのメンバーも多数参加した。特定非営利活動法人有明海再生機構、独立行政法人水産総合研究センター西海区水産研究所（西水研）及び(株)いであの 3 者が合同で受託した事業に、プロジェクト長荒牧は受託事業の事務局を、速水、大串は 3 つのワーキンググループのうちの 2 つのグループ長を務め、マスタープラン原案の作成に大きく貢献した。その他、有明海研究者会議を佐賀大学で開催するなど、研究者連携の中心的役割を果たすことができた。

目標 3

プロジェクトに参加しているコア研究者の各種団体からの外部資金獲得総額は 2,023 万円、目標以上の外部資金を獲得することができた。

目標 4

ニュースレターは 1 回しか発行できなかったが、懸案であったホームページの全面的な見直しを行い、未だ十分であるとは言えないが英語版のホームページの内容を充実することができた。

その他

- 1) 農学部附属浅海干潟総合実験施設の時代から蓄積されてきた有明海観測塔の流速等に関するデータの整理ができ、その研究成果を学会に発表することができた。過去に蓄積された佐賀大学の貴重な財産を活かすことができたことは、本年度の貴重な成果であった。
- 2) 荒牧プロジェクト長は、有明海総合研究プロジェクト、有明海・八代海総合調査評価委員会、有明海再生機構における活動に加え、特定非営利活動法人有明海ぐるりんネット理事長として、有明海及び有明海沿岸域に関する各種イベントの開催、情報発信等の幅広い活動が認められて、平成 19 年 6 月に環境大臣表彰を受けた。

平成 19 年度のプロジェクト全体の自己点検評価

- 1) 平成 19 年度環境省請負業務「有明海・八代海総合調査推進業務」の作業を通して全国で実施されている有明海・八代海に関する研究の全容がほぼ理解でき、佐賀大学における有明海総合研究プロジェクトの位置づけが明確となった。プロジェクト研究のまとめに入る 2 年前の時点でこのような作業に参加し、佐賀大学の有明海研究の成果と問題点を確認できたことは、大きな収穫であった。この作業に従事した研究者は、自分の研究対象分野ばかりでなく有明海・八代海に関する総合的な視点を獲得したこ

とで、次代の研究リーダーに成長したものと確信する。

- 2) 有明海総合研究プロジェクトのホームページの更新を図り、英語ページを充実できたことは大きな成果であるが、ニューズレターを1度しか発行できなかったことは今後の改善点である。
- 3) コア1内でモデル作成の打ち合わせを通して研究者間の成果を公開し、不足する研究テーマを確認する等の作業を行ったが、プロジェクト全体としては、環境省委託業務に精力をそがれ、プロジェクト内における研究の方向性の確認が十分に行えなかったことは反省材料である。

イ 財務に関する事項

ウ その他組織運営に関する事項

(5) 施設の領域

ア 施設、設備等の整備状況に関する事項

【点検評価結果】平成19年度以降の研究室確保に多くの努力を必要とした

【状況と理由】平成18年度までは理工学部、農学部、医学部の協力で専任教員及び研究員の研究室・実験室及び事務室を確保することができたが、学部教育研究棟の改修及び学会改編に伴う教員研究室の確保のため、借用していた部屋を18年度中に明け渡さなければならなくなり、新たな研究室及び事務室の確保に多くの努力を必要とした。

イ 施設、設備等の利用状況に関する事項

【点検評価結果】概ね良好に遂行されている。

【状況と理由】理工学部共用研究室、理工学部都市工学科の研究室、実験室を賃借するなど、大学施設の有効利用を積極的に進めている。また、データ取得の連続性を確保するため農学部が設置していた有明海観測塔と同じ位置に新たに観測塔を設置し、観測を開始した。18年度に購入を計画していた設備はすべて購入し、調査・実験に使用している。

ウ その他施設、設備等に関する事項